（社）日本ライフストーリー研究所　　2022/10/15　第 30 号

JLSR ニュースレター

「原爆投下されたタイガース」

好井　裕明

桜井さんから巻頭言を書くよう依頼される。これまで研究所にはほとんど貢献していないのに私などでいいのだろうか。特にライフストーリーに関係しなくてもいいから、気楽に好きに書いてと優しく、柔らかくそしてどすがしっかり効いた“桜井調”で頼まれると、もう断われない。

さて何を書こうか。考えだすといろいろと思いつくことがある。今年 7 月に北海道大学で授業をする機会があり、せっかくなのでウポポイ（民族共生象徴空間）に行った。そこで感じたウポポイの“気持ち悪さ”について書こうか。最近見て衝撃を受けた岡本太郎式特撮活劇「タローマン」について書こうか。定年退職し東京を離れ、ほどよい田舎で大学の雑務から解放された毎日を過ごしている。2 キロほど離れたスーパーへはリュックをかつぎ、歩いて買い物に行っている。近所の年寄りたちは軽自動車でやってきて、買い物をし、スーパーの隣にあるフィットネスジムで汗を流している。歩けば運動になるのになんでわざわざ自動車で来て、フィットネスジムで健康維持するのだろうか、等々浮かんでくる。そのなかでこの間気になっていたのが「原爆を投下されたタイガース」だ。

8 月 6 日、マツダスタジアムで行われたカープ対タイガース、リードされていたカープが 9 回裏に反撃し劇的な逆転勝利をおさめた試合だ。試合翌日タイガースファンのユーチューバーがあげた動画に「【惨劇】原爆落とされた並みの衝撃的な逆転サヨナラ負け」「最終回に阪神、原爆投下された」という言葉が書かれていた。当然ネットでは批判が巻き起こる。本人は『はだしのゲン』を全巻読んだことがあり、十分わかっていたつもりだったが、感情に任せて書いてしまったと反省の弁を語っている。

私はこのニュースを知り、驚きながらも、かつてあった日常的事実を思い出していた。昭和 30 年代、アメリカやソ連が毎月のように大気内核実験をやり、その記事が新聞に載っていた。冷戦下、戦争での原水爆使用が「いま、ここにある危機」であった時代だ。でも同時に「強力な水爆打線」「チームの核弾頭として」等々、原水爆の比喩が当時のスポーツ紙によく使われていたのだ。原水爆禁止、反核運動や被爆者運動は盛んに行われていたし、マスメディアも私たちもその事実は認識していたはずだ。そして私たちはこうした見出しや表現を被爆者に対する悪意、被爆者に対する無理解の象徴だとして批判することなく、単なる比喩として受けとめていたのだ。

もちろん当時と今とでは人権や差別、反核、平和などをめぐる私たちの常識的理解は異なっている。そのため簡単に比べることはできないが、今回の動画が以前の比喩とは決定的に異なる点があるように思える。それは「広島が」阪神に原爆投下したと語られたことだ。アメリカに原爆を投下され街は壊滅的な打撃を受け、膨大な数の人間が殺され、その後も放射能被害が続いている広島。被爆の悲惨や不条理を嫌というほど味わいながらも怨念や怒りを反原水爆、反核平和の運動へと昇華させ続けている広島。その広島が、はたして阪神に「原爆を投下」する

だろうか。『はだしのゲン』を読みさえすれば十分だと考えていたという認識自体お粗末だと言わざるを得ないが、カープの猛反撃を伝える比喩として「原爆」を想起し、そのままカープが「原爆」を落としたと表現してしまう背後には、被爆者や被爆問題、さらには広島や長崎の惨禍に対する理解や想像力が恐ろしいほどにまで欠落しているとしか言いようがないのではないだろうか。

広島が原爆投下したというメッセージ。これはある個人が感情に任せて思わず口走った“例外”ではないだろう。それは今、私たちが生きている日常のありようを象徴しているのだ。再び核兵器の現実の使用が「いま、ここにある危機」となっている現在、私たちの日常や常識的な了解の中で、どのように被爆問題やヒロシマ、ナガサキが新たに意味付与され、あるいは意味が“空洞化”されつつあるのか。解くべき重要な社会学の課題だと、私は思う。

（よしい・ひろあき　2023 年 4 月より摂南大学特任教授）

第 14 回ライフストーリー調査研究講習会の報告

2022 年 7 月 17 日（日）に第 14 回ライフストーリー調査研究講習会を開催しました。今回は、これまで講習会に参加したことがない方々向けの入門編で、参加者は約 19 名でした。

以下に、参加者の感想（抜粋）を掲載します。

〇研究手法の発達発展の背景をお話しいただき「ライフストーリー研究」の重要性がとてもよくわかりました。信頼性妥当性を高める方法が確立されていることもよくわかりました。また、研究プロセスとして、複数の研究者間での意見交換が重要なことについて、とてもよくわかりました。ていねいなご説明をいただき、今まで不明確だった点がとてもよく理解できたように思います。

〇ライフストーリーの基本的枠組みについて、丁寧かつ具体的に教えていただき、大変良かったです。ライフストーリーとライフヒストリーの異同がよく分かる内容でした。

〇ライフストーリー研究の考え方、まとめ方が理解できました。これまでは書籍などで学ぶのみでしたが、今回は直接講義を受けることができ、具体的な方法論を学ぶことができました。

資料もとても分かりやすく、大変貴重なものをありがとうございました。資料は、今後も活用していきたいと思います。

TS の引用の仕方や、論文のまとめ方、また、信頼性、妥当性についての倫理審査への対応なども具体的にお話をお伺いできたのがとても良かったです。

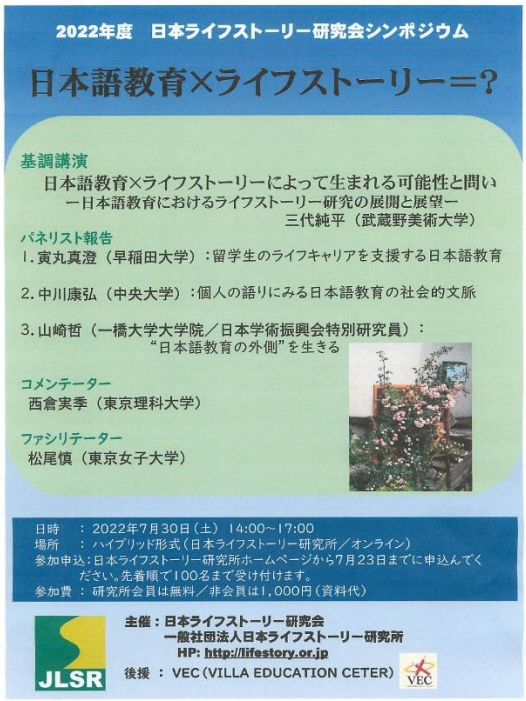
〇修論の悩みについて質問ができて大変助かりました。ずっと悩んでいた問題なので、解決できるのはよかったです。非常に感謝しております。

〇二つの論文事例を通じて、どのようにインタビューの内容を論文に入れた方がいいかを教えてくださったのは素晴らしいと思います。大変勉強になりました。

シンポジウム「日本語教育×ライフストーリー＝？」開催報告

2022 年 7 月 30 日（土）に、研究所としての初めてのシンポジウム「日本語教育×ライフストーリー＝？」をリアル／オンラインで開催しました。

司会は、松尾慎さん（東京女子大学）。基調講演の三代純平さん（武蔵野美術大学）「日本語教育×ライフストーリーによって生まれる可能性と問い―日本語教育におけるライフストーリー研究の展開と展望」に続き、寅丸真澄さん（早稲田大学）「留学生のライフキャリアを支援する日本語教育―ライフストーリーが拡げる言語教育の地平」、中川康弘さん（中央大学）「個人の語りにみる日本語教育の社会的文脈―寄り添いと自己相対化の先にあるもの」、山崎哲さん（一橋大学大学院　社会学博士後期課程／日本学術振興会特別研究員）「“日本語教育の外側”を生きる―モデル・ストーリーを持たない中国帰国者三世」の報告が行われました。討論者に社会学分野から西倉実季さん（東京理科大学）がコメント、参加者を含む総合討論では、さまざまな分野の学際的な意見交換が行われました。参加者数は報告者も含め約 80 名でした。



以下に、参加者の感想（抜粋）を掲載します。

○日本語教師同士のインタビューで、報告者がどこまで関わるか、いわゆる「当事者性」をどう捉えるかということを考えていたところでしたので、後半の議論がとても参考になりました。「傾聴」のコツも、研究内容やどんな立場でストーリーを聞くのかによっても変わってくるというお話が聞けてよかったです。

初めて参加しましたが、講演の後にきめ細かい討論がなされ、また講演や報告をされた方々がフロアからの質問にも丁寧にお答えくださり、とてもわかりやすかったです。

○「応答責任」ということばが心に残りました。私は、さまざまな日本語学習者と日本語教師の声を聴くことができる場所にいますが、聴き合い語り合う場をつくり続けること、語られたことばに耳をすませて何度も聴き直すことから何か見えてくるかもしれないと思いました。

○生き生きとした発表と議論がなされて、よいシンポジウムでした。大変有意義な機会をいただきありがとうございました。

○日本語教育学と社会学の言葉の認識の違い（「当事者」という言葉の定義など）が炙り出され、最後のやり取りはもっと聞いていたかったです。

日本ライフストーリー研究会 第８回夏期研究集会報告

2022 年 8 月 28 日（日）にリアル参加と Zoom 参加を併用する形で第 8 回夏期研究集会が開催されました。全体を通じて約 40 名の参加があり、今年度も、報告終了後にはバーチャル懇親会を開催しました。ここでは、発表者と参加者の感想を紹介します。

第 1 報告：山本哲司（京都精華大学）「寺院解散の語りと地域社会変容の経験について」

《発表者感想》

報告では「寺院解散の経験の社会的意義、その後の生活における伝統仏教への福祉的希求」を研究目的とする島根の3事例を紹介しました。

1:千葉県の寺院の分院として残る住職の生家である寺院。門徒は無くとも集落の寺院として護持する状況を紹介しました。2:3つの寺院の解散を支援した代務住職の負担と、廃屋化しようとも門徒がある限り「廃寺」と呼べない状況を紹介しました。3:寺院の解散ー吸収合併を経験した代務住職と門徒総代から解散後のヒト・モノの継承について若干ですが紹介しました。

質疑では a）手法としてのライフストーリーの意義について、b）寺院解散の語りの”生産的側面”について c）今後、住職／門徒のいずれの語りを主眼とするかについて等々、時間内外にいくつもご指摘をいただきました。今回、宗教文化・地域文化の変容を個々人の経験として描くため、現状報告に終始し語りの分析に乏しくなりました。いただいたご指摘に示唆を得て、事例をまとめていきます。近々では1の事例について僧侶・門徒の両者の語りの対照から課題整理を考えています。都市の僧侶は”家族と望郷の語り”を基調に信仰・教化の場として寺院をまなざします。地元の方は”地域生活として寺院護持”を基調に語ります。語りの検討から過疎地寺院の在り方を考えていきたいと思います。

《参加者感想》

○貴重なデータのご発表をありがとうございました。全く自分と違う分野の研究だったので理解が追いつくか不安だったが、現場へ足を運び、その聞き手へ出会う

（組織へのコンタクトや受け入れに際しての相手の不信感など含めインタビューの受け入れ方など）という行為そのものは、分野に垣根はないんだなあーとリアルに想像しながら聞くことができた。大変興味深いものでした。
○寺院解散という社会現象から、人口減少と地域の解体いう大きなテーマにいきつく、興味深い報告でした。依然として地域集団を維持する文化装置としての寺院が必要であることがわかりました。

第 2 報告：河野義貴（宮崎県立看護大学）「アルコール依存症者のライフストーリーにおける自助グループの意味」

《発表者感想》

「アルコール依存症者のライフストーリーにおける対人関係」の題名で発表させていただきました。アルコール依存症者が抱えている苦しみの根本に対人関係の問題があると考え、支援の性質を明らかにしたいと思って研究に取り組み、発表させていただきました。

ライフストーリー研究が対話構築主義を土台にしており、相手のため自分の為と区別せず、相互関係を大事にするあり方に感動する気持ちと学びが重なり、解釈が飛躍していることに発表を通して気が付きました。また、インタビューにおける構えを表現できていなかったために解釈の根拠を示すことができていませんでした。研究者が研究者であると同時に看護師としての構えを持ちながらインタビューを行った内容について表現を検討します。

今後、2 人目以降のインタビューを実施していく予定です。研究会メンバー皆様から頂いたご助言を活かして、より良いインタビュー、分析を行い、論文投稿を目指していきたいと思います。

桜井先生の丁寧なご指導、柔らかいお人柄が研究会全体の雰囲気を作り、私の研究意欲につながっています。桜井先生、研究会メンバーの皆様に心から感謝しつつ、これからも学べるものを可能な限り吸収し、社会の役に立つ論文が書けるようになりたいと思っています。

《参加者感想》

○河野さんの協力者へのまなざしからは、研究という枠のみではない、精神科看護にたずさわる者という構え（真摯な姿勢）が伝わってきました。日頃の自分を反省しなきゃいけない気持ちになりました。
○私は臨床国語教育というのをずっと構想しており、ひとりひとりの学習者に寄り添った教育を、と思っている中で、依存症の方が回復していく姿を教育の姿のあるべき一つの姿として考えてきました。その点で興味深かったです。
○専門領域は異なりますが看護分野なので興味深く聞かせていただきました。

第 3 報告：家根橋伸子（東亜大学）「過疎地域で暮らす外国人母親のライフキャリアと日本語」

《発表者感想》

貴重な機会をいただき、ありがとうございました。私は日本語教育が専門ですが、様々な分野の先生方からいただいたご質問、ご意見にははっとさせられることの連続でした。例えば、報告題目が示すように、私は外国人母親がライフキャリアを形成していく＝多様な社会的アイデンティティを獲得していく過程を見ていたつもりでしたが、気づかないうちに「母親」の部分に焦点化していたこと。しかしそのことは調査協力者 A さん自身が「母親」しか持ち得ていない可能性もあること。そもそもライフキャリアという用語の私自身の定義があやふやであること等々。まだ未消化ですが、リュックに食べ物をたくさん詰めていただいて、さあ行け！と背中を押していただいた気持ちです。最後に、振り返りで「インタビュー前の関係者の聞き取り調査をご本人も承諾されていたのかが、あとから気になりました」との記述をいただきました。A さんへのインタビューを決める前に地域の外国人に関係する人たちの聞き取り調査を終了していたため、聞き取り調査についてAさんの承諾は取っていませんでした。過疎地域では匿名で話されても誰のことかわかってしまいます。報告会では聞き取り調査で聞いた話とAさんの認識の齟齬を話しましたが、論文には書けません。調査倫理については悩むことばかりです。次は皆さんの報告をぜひお聞きしたいです。

《参加者感想》

○「自立した言語使用者」でなければ社会参加できないのか？という研究者ご自身の問題提起に対し、自立した言語使用者になってからコミュニティ・社会参加する（ものというホスト・コミュニティや、日本語教授者や

支援者の立場、ビリーフ、そしておそらく学習者自身もそれを内面化している）のではなく、社会参加を通して言語学習へと動機づけられていくということが当事者の語りによって裏付けられていっており、非常に重要なワークだと感じました。
○分野違いということもあり理解できるか不安でしたが、インタビューデータを客観的に聞く機会となり、貴重なご発表を聞けて感謝です。また、インタビュー上のご苦労がひしひしと伝わるご発表でした。質問もさせていただきましたが、外国人へ母国語ではないインタビュー実施に伴う、相手の発語に対しての確認をする上での聞き返しの特徴が、自分の分野とは大きく違う点でしたので興味深く聞けました。

会員エッセイ

姉妹ライフストーリーの顛末

矢野　泉

姉妹の生きざまを最初から研究していたわけではなかった。知り合って途中からあまりの面白さに、このひとたちのライフストーリーをぜひ研究してみたいと切望したのである。太平洋戦争前に姉妹で生まれた女性たち、戦争をはさんで弟妹に恵まれた。戦争中は疎開で、かやぶき屋根の下おカイコさんとも同居。まちは空襲で焼け野原。黒焦げのご遺体がごろごろ転がっていたという。防空壕のなかで蒸し焼きのようにされた亡くなられた県民都民もおられた。なにが生死を分けるのか。戦争前の大正末期、彼女らの父は燃料商人から建具屋に転身、関東大震災復興で商いは繁盛した。しかし父は病死。姉妹は働きに出た。上の弟がようやく高校を卒業、大学はあきらめたと聞いた。手先が器用な弟は内装業、下の弟は電車模型製造業になった。母はがんばって何度も会社を立ち上げた。その会社社長の名刺を胸に、下の弟は模型システムづくりの営業もかける。模型はもともと小さな業界であるため、利益を出すのは並大抵ではない。それでも、後期高齢者となる今年も朗らかに営業、姉たちの店の手伝いに精を出す。

わたしは、勤務する大学の研究紀要に姉妹とであって 12 年目となる夏、執筆許可を姉妹に求めた。草稿を見せたら、なんと NG。リアルに書きすぎだという。ダメな箇所には「✖」を入れてもらって、書き直しになった。もう執筆をあきらめた。すると落ち着かない。どんどん不安になり、自室でひとり叫び声をあげたりした。何とかせねばと、上の姉さんを説得した。プライバシーがあらわになることはないから信頼してほしいと。受諾された。

すぐ下の姉さんはもっと具体的にリアルに書いてほしいと熱望なさるし、姉妹たちそれぞれ意見がある。自らの研究能力のなさを恨みながら、少しでもよい研究をと締め切りまで励んでいる。

思い立ったが吉日、では遅い

中原　逸郎

終戦の 1945 年から 77 年を経て、戦争体験の聞き取りは戦争体験者の高齢化とともに、緊要度を高めている。元同僚の紹介で知り合った深田正雄氏は、呉工廠（広島県）勤務の海軍技術将校で、1941（昭和 16）年には艦政本部（海軍省、東京）に勤務し、中国、台湾等に出張した。

筆者は阿川弘之の『米内光政』（阿川、1978）等海軍小説で花街の存在や花街の構造を初めて知ったが、学術分野で旧日本軍人の思いや旧海軍と花街関係に関する聞き取りは多いとは言えない。そこで、2017（平成 29）年 7 月 10 日、同 12 月5日、当時 104 歳の深田氏に対する聞き取りを神奈川県の療養施設の深田氏の部屋で行った。

深田氏は 1910 年代に生まれ、1935（昭和 10）年東北帝国大学工学部電気工学科を卒業後、軍に入り、厳しい艦隊勤務を経て一号館（戦艦大和）の中枢部の技術担当者となった。また、激戦地のガダルカナルや米軍の爆撃を受けた台湾での出張話は冒険小説のようなスリルがあった。深田氏は言葉少ない方だが、海軍用語を交わし、電気を専攻したが故に米国との苛烈な兵器開発競争に身を捧げることになった一軍人の生涯の浮彫を試みた。

しかし、聞き取りは 2018 年 7 月 20 日、氏の突然の死で終焉を迎えた。深田氏の死後、氏の軌跡をたどり、台湾高雄、同台南調査を 2019（令和元）年5月１日、

同 12 月 29 日、30 日に実施し、現地の旧植民地花街の調査も行った。こうして聞き取りの論文化を試みたが、ライフストーリー調査のめざす調査協力者の心情の「分厚い記述」にはならなかった。

思い立ったら吉日という言葉がある。しかし、それでは遅い場合もある。

調査協力者と連絡を密にし、丁寧な聞き取りを重ねていくことが、ライフストーリーの基本だ。そのためには、思った以上に時間がかかる。ことにご高齢の方の聞き取りは健康状態を十分に考え、早くから十分な時間の確保が重要だと改めて感じた。

第 15 回ライフストーリー調査研究講習会 参加者募集!!

☆開催日時：
2022 年 11 月 13 日（日）
10:30～16:40

☆テーマ：
ライフストーリー・インタビューとトランスクリプトの作成・利用法

☆定員（先着順）：
オンライン参加　20 名程度
研究所リアル参加　5 名程度

☆申込：
・11 月6日（日）までに、ホームページから申し込んでください（受付開始は、あらためてメールで連絡します）。

☆受講料：
会員：3,500 円　非会員：5, 000 円
・参加者には申込確認と受講料支払いのメールを致しますので、その後、参加費の振り込みをお願いします。

☆お問い合わせ
info@lifestory.or.jp へお願いします。

【講習会の内容は、メール、FB でお知らせします】

LS 研 10 月例会のお知らせ

日時：2022 年 10 月 23 日（日）13:30～16:30
場所：日本ライフストーリー研究所
リアル参加（5 名ぐらい）およびオンライン参加

報告者：福田あすかさん（緩和ケア認定看護師）

報告タイトル：長い語りをどう分析すればよいか（仮）

概要：「大切な人との死別後から現在までの個人の体験」をテーマに、PTG（posttraumatic growth【心的外傷後成長】）経験者にライフストーリー・インタビューを行っています。

大切な人との死別後、変わったことや感じたことを語ってもらっています。1 回目は傾聴インタビュー、2 回目はアクティブインタビューを心がけたものの語り手のお一人はお話してくださるのが大好きだったということもあり、また職業上、傾聴することが多く、上手に、対話にもっていけなかった私自身の問題もあるのですが、長い語り、しかも詳細に語られているため、分析にどう取り組めばよいのか、みなさまからのアドバイスをお願いします。

申込：以下の URL よりお申し込みください。
http://lifestory.or.jp/meeting_form/

★報告者は随時、募集中です。メールにてお問い合わせください。『語りの地平』に投稿希望の方は、ぜひとも、報告をお願いいたします。

受け入れ論文、図書、報告書

2022 年 7 月 9 日～10 月 15 日（下線は会員）

論文、報告書、著書などをお送りください

・青山美智子，2022『マイ・プレゼント』PHP 出版.

・井腰圭介，2022「日本社会学に対するヴェーバー研究の今日的意義と課題--資料操作と意味理解のあいだ」『理想』第 707 号，理想社.

・今井昭彦，2021『「北鎮都市」札幌と戦没者慰霊――護国神社の成立まで』御茶の水書房.

・中尾知代，2022『戦争トラウマ記憶のオーラルヒストリー』日本評論社.

・山村淑子・旭川歴史を学ぶ母の会（編），2021『沈黙の扉が開かれたとき――昭和一桁世代女性たちの証言』ドメス出版.

新入会員（2022 年 7 月以降、順不同）

松本宏樹（一橋大学大学院生）
佐々木直美（山口県立大学）
大橋瑞穂
石川良子（松山大学）
灘光洋子（元立教大学教授）
李光曦

『語りの地平』第 7 号
12 月初旬に発送予定です。

住所変更手続きのお願い

お引越し等で住所が変わられた際には、ライフストーリー研究所事務局まで、住所変更のご連絡をお願いいたします。

年会費の納入についてのお願い

研究所は皆さまの会費で運営をしております。年会費を未納の方は、お振込みをよろしくお願いいたします。

事務局から
すずろごと

○坂道を登り切った場所から、川を挟んだ丘陵地にあるゴルフ場を見るために、人込みを避けて一駅歩いた。たどり着いてその方向に目をやると、新築の二棟の集合住宅が対岸の風景を遮っている。その前までは、小ぎれいに刈り取られた芝が木々の間からはっきり見えたものである。帰路、最寄りの駅から 100m のあいだにある 50 店ほどの飲食店の名前を数えてみると、30 年前から営業している店は 2 軒だけであった。人口集中のありさまを考えながら、新規開店のコンビニに入って麦酒を買った。(SH)

○40 年近くの前、バイトで貯めたお金で学割の周遊券を買い、友人と旅に出かけた。「大垣夜行」で真夜中に駅を出発し、早朝に東京駅到着。その夜は会津磐梯高原、そして鳴子温泉、乳頭温泉を巡り、岩手の宮古から三陸リアス鉄道で仙台から帰る 5 泊 6 日の旅。ずっと鉄道やバスに乗っているだけでも楽しかった。旅の行程は前日の夜に「明日はどこに行こうか？」と時刻表を読み込み、宿は着いた駅の観光協会で決めるという気ままそのもの。今年は鉄道 150 周年、時刻表で一筆書きの線路を探してみようか。(OA)

○先日、JOHA（日本オーラルヒストリー学会）のシンポで、オーラルヒストリーとライフストーリーの違いについて話す機会があった。ヒストリー派からは語りの事実性、ストーリー派からはリアリティが強調されるが、どこにちがいがあるのだろう。ならば、三谷幸喜の「鎌倉殿」はどちらなのだろう。フィクションだわな。(SA)

○我が家に初めての小学校の運動会がやってきた。どれどれ、1 年生の演目は・・・ダンスと徒競走。なんともシンプル。自分が子供の頃には、平均台の上を渡ったり、飴玉競争もあったりしたような。小麦粉の海に潜む飴玉をめがけて入れ替わり顔を突っ込むあの競技。もうお目にかかることはないのだろうなぁ。(TT)

（社）日本ライフストーリー研究所
〒408-0032 山梨県北杜市長坂町大井ケ森 1176-489
E-mail: info@lifestory.or.jp HP: http://lifestory.or.jp